
「心霊探偵 スメラギ」シリーズ3 時効の闇

綾瀬一美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「心霊探偵 スメラギ」シリーズ3 時効の間

【Nコード】

N6992Y

【作者名】

綾瀬一美

【あらすじ】

幼い子どもを含む一家全員が殺され、遺体の一部が持ち去られた悲惨な事件から15年の月日が経ようとしていた。

時効が迫るなか、当時の担当刑事だった鴻巣はスメラギ探偵事務所を訪ねる。1か月前に亡くなった先輩刑事から、どうにも事件が解決できないとなったらこの男を訪ねると言われたからだが、スメラギが霊能力者だと知ると、事務所を後にする。

鴻巣を追い払ったスメラギは、知り合いの不動産屋からいわくつきの物件の霊視を頼まれる。事件があつたせいで売れずにいるその物件こそは、15年前の惨劇の舞台となつた家だつた。

同じ頃、殺された揚句に地獄に落とされた被害者の霊は、霊の心残りを解消する人間がいると聞かされる。その人物を頼れば犯人への復讐を果たせるかもしれない――脱獄し、人間界へとやってきた坂井は、その男、銀髪の男を探した――

事件

「ひでえな」と言いかけ、高砂次郎は口をつぐんだ。刑事課の刑事にとつて「ひでえな」とは、いわば挨拶のようなもので、特に意味はない。凄惨な事件現場を目の当たりにして「ひどい」と口に出して言うことにより、自分はまだ殺人現場を「ひどい」と思う感性をもちあわせているまともな人間だと、周囲と、何より自分自身にアピールするのだ。

ぼろ雑巾のように切り刻まれた死体、壊れたおもちゃのように打ち捨てられた、かつて人間であつたはずのもの。現場をこなすにつれ、それらが日常の風景と化し、テーブルに並んだ食器を眺めでもするかのように、死体をみても動じなくなるようになる。冷静なだけだと思いたいが、その実、慣れが人間性を磨耗しているのではないかと不安になる。

ひよつとして自分も、平然と殺人を犯したものと同じ感性なのではないのか――その恐怖心から、「ひどい」という言葉がいつか口について出るようになる。「こんなひどいありさまを目のあたりにして、ひどいと思える俺はまだまともな人間だ」という意味だ。

だが、その現場に足を踏み入れたとたん、挨拶がわりの「ひでえな」という言葉は、高砂の喉の奥にひっこんでしまった。その場にいたものたちの誰もが言葉を失っていた。現場を撮影している鑑識班のカメラがたてるシャッター音だけが、まるで唯一生きているもののごとく、声をあげていた。

冬の日差しがはいりこむ、あたたかくて明るい居間だ。ソファ―

にこしかければ、庭とテレビと両方とが視界に入る。フローリングの床はそのままダイニングへと続いていた。テーブルに椅子は4脚そろっていた。その先には台所があった。調味料や食料品の一部が表に出ていたが、きちんと整頓されて置かれてあり、雑然とした感じはない。黄色を基調とした台所は、その家の主婦の好みなのだろう。高砂は、美人ではないかもしれないが感じのいい、柔らかい微笑みを浮かべる女主人の姿を思い浮かべた。

キッチンの床には、赤茶けたマットが敷かれてあった。明るいいえないその色合いは、壁や小物と色合いがそぐわない。近寄ってみると、それはマットではなく、乾ききって干潟のように所々がひび割れている血の海だった。潮がひいた海にぼっかりと姿を現している浮島は、かつて人間であつたろう肉の塊だった。おそろしく巨大な肉の塊は殴りつけるような異臭を放っていた。

「頭部は？」

「まだ発見されていません」

「切断場所はここか？」

「血の量から判断して、おそらく」

死体には首から上がなかった。切断面はすでに乾いて、背骨がのぼったばかりの満月のように白く浮き上がっていた。縞模様だったとおもわれる男物のパジャマは血を吸い込んで、赤茶色に変色していた。

「すみませんっ、ちょっと…」

若い刑事が庭に面した窓から外へと脱兎のごとく飛び出していった。「おい、現場を荒らすなよ」と鑑識の声が飛んだが、聞こえているのかどうか、庭の隅で吐いていた。

配属になったばかりの新任刑事、鴻巣一郎だ。

いつもなら、ベテラン捜査官たちが、殺人現場に気分を悪くしている若手刑事をからかうのだが、今日に限っては誰も庭にかがみこんでいる鴻巣一郎を相手にしようとしないう。吐けるものなら吐いて気分をすっきりさせてしまいたい、高砂はじめベテランたちの誰もがそうおもっていた。

戻ってきた鴻巣一郎は、すえた臭いをただよわせていた。安っぽいローションとあわせて、新人刑事のおいだ。あと数件も殺人現場に居合わせれば、体が死臭に慣れる。体が慣れれば、感覚も麻痺して、そのうち無意識のうちに「ひどいな」という言葉が口について出るようになる。そのころには、すえた臭いは、歩き疲れた足元から漂うようになり、年がら年中水虫に悩まされるようになる。そうになったら、一人前の刑事だ。

「和室の母親は両足を、2階の寝室の奥さんは両手、子ども部屋の子どもは両足を切断されています。どれもまだ発見されていません」「子ども？」

「まだ9歳の男の子です。9歳ですよ、まったく……」

田所刑事はそう言ったきり、黙って天井を見上げていた。同じ年頃の子どもをもつ親として、犯人に対する憤りは、子どもものいない高砂より強いのだろう。大きな目と受け口のひよつと顔の裏に、刑事ではなく父親の顔がのぞいてみえた。

鴻巣をうながし、高砂は2階へとむかった。2階から降りてくる他の刑事は一樣に黙ったまま、高砂たちにかける言葉はなかった。だが、すれ違いざまにうなずきあう男たちのまなざしが多くを語っ

ていた。

「この犯人は必ずあげてみせる」――戦いがはじまった。

*

1月7日、xx区xx丁目坂井信行さん宅で、この家に住む会社経営、坂井信行さん（38）、妻の由紀子さん（38）、長男の徹くん（9）、同居していた母親の富子さん（68）が、死体で発見された。この日、新年の挨拶に訪れた兄の坂井圭介さんがインターフォンを鳴らしても返事のないのを不審に思い、近所の交番に連絡かけた警察官とともに、変わり果てた姿の一家を発見した。警察の発表によると、死後10日以上が経過しており、死因は絞殺、遺体の一部が切断されていた。切断された部分はいまだ発見されていない。兄の坂井圭介さんによると、一家は昨年末の26日からハワイへ海外旅行に出かける予定で、6日には帰国しているはずだった。玄関先にスーツケースがそろえられていたこと、一家がパジャマ姿であったことから、出発前日の夜に殺害された可能性が高いと警察ではみている。庭に面した窓ガラスが割られており、犯人は窓ガラスを割って坂井さん宅に侵入、殺害に至ったものとおもわれる。遺体の一部を切断、持ち去ったとおもわれるが、現金や貴金属の類、車も紛失しているため、警察では、強盗と怨恨の両方の線から捜査を進めている。

【1】

雑居ビルの林立するなか、目指すスメラギ事務所は頭ひとつ打ち込まれて立っていた。師走の声も聞こえてこようかというこの時節、4階建てのビルの4階の窓は開け放たれ、「スメラギ探偵事務所」と読めるはずの案内が、「ス」に「メ」が、「ラ」に「ギ」が重なって、何ともおかしいことになっている。

鴻巣一郎は、薄っぺらなコートのポケットから一枚の名刺を取り出し、そこに書かれてある住所と名前を確かめた。

スメラギ探偵事務所

××区××ビル4F

全開の窓を見上げ、鴻巣はコートの襟をきつく閉めると、雑居ビルの階段をあがっていった。

「スメラギ探偵事務所」と表札のかかったドアに手をかけようとすると、すりガラスのはめ込まれた木製のドアはきしんだ音をたててひとりでに開いた。みかけは古いビルだが、自動ドアとは、最新の設備を整えているらしい。

内開きに開いたドアをすりぬけると、つんと石油ストーブのにおいが鼻をついた。毛布を肩からすっぽりかけた白髪の老人が、背を丸めて、石油ストーブに両手をかざして暖をとっていた。

「スメラギさんか？」

振り返ったのは若い男だった。マフラーを二重三重に巻いてもまだ寒いらしく、紫色の唇を震わせていた。年頃は24、5ぐらいだろうが、短い髪を銀色に染めてハリネズミのように毛先をたてている。わざわざ染めなくても、年をとればいずれは白髪になるのになあと、鴻巣は、このごろ白髪のちらつきはじめた頭をくるりとなでた。

「俺に頼み事があるってか」

「ああ」

鴻巣が警察手帳を取り出して身分を明かそうとする前に

「あんたも刑事か？」

相手が鴻巣の正体を先に見抜いた。15年も刑事をやっていたれば、警察手帳を首からさげているも同然か。1年しか続かなかった結婚生活で、妻は別れ際に「暗い目をしている」と言い、鴻巣のもとを去った。見合いで知り合い、人の裏の顔ばかりみてきた鴻巣とは正反対に物事の表だけを見る素直な明るさが気に入って結婚した。なごやかな家庭を望んだが、暗闇ばかりみてきた目には彼女の明るさはまぶしかった。人を疑うことを知らずに生きてきた彼女にとっても、鴻巣がそうと気付かずに家庭に持ち込む暗闇が恐ろしかったのだろう。

「暗い目をしている」――言われるまで自分では気付いていなかった。鴻巣の周りには誰もが「暗い目」をしていた。人が隠そうとするものをみようとする目。強面だろうと、女好きする顔をしているように、顔つきにかかわらず、数年も刑事をやっていたら、みな一様に、人の裏側を見透かそうとする目つきになる。刑事の目だ。

40 すぎれば自分の顔だという。若いころは端正と言われたこともあったが、顔でもてたためしかない。端正とは、目鼻一そろい揃っているという意味合いだったか。40 となった今では、目には見えないものをみようとすると「暗い目」をした刑事の顔をしているのだろう。

鴻巣の目の前にいる白髪頭の若い男もまた、人の目にはうつらないものを見透かそうとする「暗い目」をしていた。同じ目をしている――そのときはそう思った。だが、男の三白眼は、鴻巣が見ているものとは全く違うものをみるのだと知ったのは、後になってからだった。

【2】

「鴻巣一郎だ」

鴻巣は胸ポケットから警察手帳を取り出してみせたが、男は一瞥をくれただけだった。

「じいさんの知り合いか？」

“じいさん”とは高砂刑事のことか。

そもそも、鴻巣がスメラギ探偵事務所を訪れたのは、高砂刑事がきつかけだった。

2か月前、鴻巣は、退職する高砂から1枚の名刺を渡され、どうにも事件が解決できないとなったら、名刺の男を頼れと言われた。名刺を受け取る鴻巣に、高砂は「実は、こいつが手助けしてくれたんだ」と耳打ちした。5年前、高砂は時効寸前の強盗殺人事件を解決した。スメラギという探偵がいなかったら、事件は時効となって犯人は自由の身になっていた、と高砂は言い、それ以上は詳しく述べなかった。

高砂のくれた名刺を思い出したのは、1か月前、脳溢血で亡くなった高砂の葬式帰りのときだった。ふと誰かが「高砂さん、あの事件だけが解決できなくて心残りだっただろうなあ」と漏らした言葉がきつかけだった。

その事件ならよく覚えている。刑事となって所轄の刑事課に配属されたばかりの頃に起きた事件で、一家全員が殺害され、遺体の一部が持ち去られたという異様な事件だった。残された遺体の状態や

他の状況証拠から、事件発生は12月25日ごろと推定され、15年目の時効の日を間近に控えていた。

高砂の供養に事件を解決しよう、鴻巣はふとそう思った。それから1か月、捜査資料をひっくりかえしたが、犯人逮捕につながる手がかりはみつけられていない。事件は継続捜査となったが、担当でない鴻巣には、時間も人手も何もかもが足りなかった。時効まで1か月あまりとなり、どうにもならないと思い、捨て鉢な気持ちで名刺のスメラギ探偵事務所を訪れることにした。

スメラギという探偵がどんな人間なのか、高砂が解決した時効寸前の事件にどうかかわったのか、何も知らされていない。鴻巣が持ち込もうとする同じく時効を控えた事件にどうかかわっていくのか、毒蛇の入った壺に手を入れる気分で、鴻巣は賭けに出た。

「高砂さんが、あんたなら何とかしてくれるだろうと言ってな……」

だが、時効寸前の事件の解決を手伝ってくれと言い出すのがためらわれた。24、5の若造が、警察が手をこまねいている事件にどう貢献できるというのか。

「また時効寸前の事件を頼むってんなら、断るぜ」

白髪頭の男は人の心を読むらしい。薄気味悪い思いに、鴻巣は身震いした。

「なんだ、そっちは生身の人間か」

そついうと、スメラギは石油ストーブからやかんをおろし、湯のみに湯気のたつ日本茶をそそいで鴻巣に差し出した。

「日本茶ぐらいしかねえんだけどよ」
「ああ」

湯気のたつものならこの際、何でもよかった。体が芯の底から冷え切っていた。事務所に足を入れたときからだ。換気のためだろうが、この寒空に窓を開けているから外から冷気が入り込んでくるのだ。忌々しそうに全開の窓をにらみつけながら、鴻巣は、かじかむ両手で湯のみを包み込み、熱い湯をすすった。

【3】

「なあ、高砂のじいさんから俺のこと何て聞いてきたんだ？」

「じいさんが解決した時効寸前の事件を手伝ったってな」

そうとしか聞いていなかったの、そうとしかいいようがない。

警察が手こずった事件を解決したというのだから、てっきり、凄腕の元刑事が出てくるのだとばかりおもっていたら、白髪頭の若造が出てきて、正直もう帰ろうかとおもっている、とは言えなかった。

「じいさんもくえねえやつだな」

「ま、言ったところで、どうせ、年のせいでイカれたんだろうって、相手にしてもらえなかっただろうけどな」

「お前、一体何者だ？」

「何者って、探偵さ。浮気調査とか迷いネコ探しとか、そんなことをやってる」

「どれくらいやってんだ、この商売」

白髪頭は片手の指をゆっくり折った。

「そうだな……5年かな」

高砂が時効寸前の事件を解決したのが5年前。ちょうどスメラギというこの男が探偵稼業に足を入れたころだ。今でも若いのだから、当時なら20歳そこそだっただろう。鴻巣からしたら「ガキ」のような男に、警察ですら手に負えなかった事件がどう解決できたというのか。

「そう5年だ」

「あれは珍しいケースだったんだ。普通は誰も残っていやしないし、おとなしく成仏しちまうんだよ」

「あんたは心残りがあるから、いつまでもうるちよろしてっけどな」

「無理だっつーの」

「おい、何を言ってるんだ？」

スメラギという男は、まるでそこに誰かがいるかのような調子でひとりごとを呟いていた。鴻巣は怖くなった。男の視線は、鴻巣の右隣に集中している。

「大体だよ、被害者の目撃証言が仮に取れたとして、どうやって証明すんだよ。『はい、刑事さん、被害者と直接話をして、こいつが犯人だとわかりました』なんて言って、誰が信じる？ だからこそ、あんただって例の事件、あとで苦労したんだろ？」

「おい……？」

ひとしきりしゃべったあと、スメラギはしぶい顔で黙りこんでしまった。

湯のみはすっかり冷え切ってしまっていた。石油ストーブの働く音だけがする。やかんがカチカチ鳴り、湯気を吐いていた。

「なあ…鴻巣さん、だっけか。あんたが俺に頼もうとしていることはだな…殺された被害者の霊と話をして犯人を割り出せてことな

「んだぜ……」

「はあ？」

「高砂のじいさんが例の事件を解決できたのは、俺がその被害者と話をして犯人を知ったからさ」

「……」

「信じるか、俺の話」

「ば、バカバカしいっ！」

鴻巣はソファを立ち上がり、入口のドアに手をかけた。だが、自動であるはずのドアは閉まったまま、押しても引いても開く気配がない。

「おい、ふざけるなよっ」

声が裏返った。吐く息が白い。よくわからないが、本能がここから逃げ出せと命じている。

「無駄だよ、じいさん。信じないやつには、はなから何を言っても無駄さ。所詮、人間は自分に見えないものは信じねえんだから」

そう吐き捨てると、スメラギはドアノブをひねった。鴻巣がどうにも開けられなかったドアは簡単にビルの廊下にむかって開き、鴻巣はその隙間に体を入れ、逃げ出すように事務所を後にした。

【1】～【3】*（前書き）

こちらに目を通される前に、まずは【1】～【3】お読みください。

【1】〜【3】＊

雑居ビルの林立するなか、目指すスメラギ事務所は頭ひとつ打ち込まれて立っていた。師走の声も聞こえてこようかというこの時節、4階建てのビルの4階の窓は開け放たれ、「スメラギ探偵事務所」と読めるはずの案内が、「ス」に「メ」が、「ラ」に「ギ」が重なって、何ともおかしいことになっている。

鴻巣一郎は、薄っぺらなコートのポケットから一枚の名刺を取り出し、そこに書かれてある住所と名前を確かめた。

スメラギ探偵事務所

××区××ビル4F

全開の窓を見上げ、鴻巣はコートの襟をきつく閉めると、雑居ビルの階段をあがっていった。

「スメラギ探偵事務所」と表札のかかったドアに手をかけようとする、すりガラスのはめ込まれた木製のドアはきしんだ音をたててひとりでに開いた。みかけは古いビルだが、自動ドアとは、最新の設備を整えているらしい。

内開きに開いたドアをすりぬけると、つんと石油ストーブのにおいが鼻をついた。毛布を肩からすっぽりかけた白髪の老人が、背を丸めて、石油ストーブに両手をかざして暖をとっていた。

（よお）

「スメラギさんか？」

振り返ったのは若い男だった。マフラーを二重三重に巻いてもまだ寒いらしく、紫色の唇を震わせていた。年頃は24、5ぐらいだろうが、短い髪を銀色に染めてハリネズミのように毛先をたてている。わざわざ染めなくても、年をとればいずれは白髪になるのになあと、鴻巣は、このごろ白髪のちらつきはじめた頭をくるりとなでた。

「俺に頼み事があるってか」

（まあな）

「ああ」

鴻巣が警察手帳を取り出して身分を明かそうとする前に

「あんたも刑事か？」

相手が鴻巣の正体を先に見抜いた。15年も刑事をやっていたれば、警察手帳を首からさげているも同然か。1年しか続かなかった結婚生活で、妻は別れ際に「暗い目をしている」と言い、鴻巣のもとを去った。見合いで知り合い、人の裏の顔ばかりみてきた鴻巣とは正反対に物事の表だけを見る素直な明るさが気に入って結婚した。なごやかな家庭を望んだが、暗闇ばかりみてきた目には彼女の明るさはまぶしかった。人を疑うことを知らずに生きてきた彼女にとっても、鴻巣がそうと気付かずに家庭に持ち込む暗闇が恐ろしかったのだろう。

「暗い目をしている」――言われるまで自分では気付いていなかった。鴻巣の周りには誰もが「暗い目」をしていた。人が隠そうとするものをみようと目。強面だろうと、女好きする顔をしているように、顔つきにかかわらず、数年も刑事をやっていたら、みな一様に、人の裏側を見透かそうとする目つきになる。刑事の目だ。

40 すぎれば自分の顔だという。若いころは端正と言われたこともあったが、顔でもてたためしがない。端正とは、目鼻一そろい揃っているという意味合いだったか。40 となった今では、目には見えないものをみようとする「暗い目」をした刑事の顔をしているのだろう。

鴻巣の眼の前にいる白髪頭の若い男もまた、人の目にはうつらないものを見透かそうとする「暗い目」をしていた。同じ目をしている――そのときはそう思った。だが、男の三白眼は、鴻巣が見ているものとは全く違うものをみるのだと知ったのは、後になってからだった。

「鴻巣一郎だ」

鴻巣は胸ポケットから警察手帳を取り出してみせたが、男は一瞥をくれただけだった。

「じいさんの知り合いか？」

（俺がまともな刑事にしてやった男だ）

“じいさん”とは高砂刑事のことか。

そもそも、鴻巣がスメラギ探偵事務所を訪れたのは、高砂刑事がきっかけだった。

2 か月前、鴻巣は、退職する高砂から1枚の名刺を渡され、どうにも事件が解決できないとなったら、名刺の男を頼れと言われた。名刺を受け取る鴻巣に、高砂は「実は、こいつが手助けしてくれたんだ」と耳打ちした。5 年前、高砂は時効寸前の強盗殺人事件を解決した。スメラギという探偵がいなかったら、事件は時効となって

犯人は自由の身になっていた、と高砂は言い、それ以上は詳しく述べなかった。

高砂のくれた名刺を思い出したのは、1か月前、脳溢血で亡くなった高砂の葬式帰りのときだった。ふと誰かが「高砂さん、あの事件だけが解決できなくて心残りだっただろうなあ」と漏らした言葉がきっかけだった。

その事件ならよく覚えている。刑事となって所轄の刑事課に配属されたばかりの頃に起きた事件で、一家全員が殺害され、遺体の一部が持ち去られたという異様な事件だった。残された遺体の状態や他の状況証拠から、事件発生は12月25日ごろと推定され、15年目の時効の日を間近に控えていた。

高砂の供養に事件を解決しよう、鴻巣はふとそう思った。それから1か月、捜査資料をひっくりかえしたが、犯人逮捕につながる手かりはみつけられていない。事件は継続捜査となったが、担当でない鴻巣には、時間も人手も何もかもが足りなかった。時効まで1か月あまりとなり、どうにもならないと思い、捨て鉢な気持ちで名刺のスメラギ探偵事務所を訪れることにした。

スメラギという探偵がどんな人間なのか、高砂が解決した時効寸前の事件にどうかかわったのか、何も知らされていない。鴻巣が持ち込もうとする同じく時効を控えた事件にどうかかわっていくのか、毒蛇の入った壺に手を入れる気分で、鴻巣は賭けに出た。

「高砂さんが、あんたなら何とかしてくれるだろうと言ってな……」

だが、時効寸前の事件の解決を手伝ってくれと言い出すのがためらわれた。24、5の若造が、警察が手をこまねいている事件にど

う貢献できるというのか。

（15年だ、12月で時効になる）

「また時効寸前の事件を頼むってんなら、断るぜ」

白髪頭の男は人の心を読むらしい。薄気味悪い思いに、鴻巣は身震いした。

「なんだ、そっちは生身の人間か」

そういうと、スメラギは石油ストーブからやかんをおろし、湯のみに湯気のたつ日本茶をそそいで鴻巣に差し出した。

「日本茶ぐらいしかねえんだけどよ」

「ああ」

湯気のたつものならこの際、何でもよかった。体が芯の底から冷え切っていた。事務所に足を入れたときからだ。換気のためだろうが、この寒空に窓を開けているから外から冷気が入り込んでくるのだ。忌々しそうに全開の窓をにらみつけながら、鴻巣は、かじかむ両手で湯のみを包み込み、熱い湯をすすった。

（頼むよ、スメラギ。あの事件を解決しないことにはおちおち死んでいられないんだ）

「なあ、高砂のじいさんから俺のこと何て聞いてきたんだ？」

「じいさんが解決した時効寸前の事件を手伝ったってな」

そうとしか聞いていなかったの、そうとしかいいようがない。警察が手こずった事件を解決したというのだから、てっきり、凄腕の元刑事が出てくるのだとばかりおもっていたら、白髪頭の若造が

出てきて、正直もう帰ろうかとおもっている、とは言えなかった。

「じいさんもくえねえやつだな」

（霊がみえる男に、被害者の霊と話をしてもらって目撃証言をとったなんて言えるか、アホ）

「ま、言ったところで、どうせ、年のせいでイカれたんだろうつて、相手にしてもらえなかっただろうけどな」

（年のせいとは何だ！）

「お前、一体何者だ？」

「何者つて、探偵さ。浮気調査とか迷いネコ探しとか、そんなことをやってる」

「どれくらいやってんだ、この商売」

白髪頭は片手の指をゆっくり折った。

「そうだな……5年かな」

高砂が時効寸前の事件を解決したのが5年前。ちょうどスメラギというこの男が探偵稼業に足を入れたころだ。今でも若いのだから、当時なら20歳そこそこだっただろう。鴻巣からしたら「ガキ」のような男に、警察ですら手に負えなかった事件がどう解決できたというのか。

（あれから5年か）

「そう5年だ」

（なあ、あん時のようにさ、今度もさっさと目撃証言をとって…）

「あれは珍しいケースだったんだ。普通は誰も残っていやしないし、おとなしく成仏しちまうんだよ」

（おれはどうなんだ）

「あんたは心残りがあるから、いつまでもうるちよろしてっけどな」（だから、その心残りをだな…）

「無理だっつーの」

「おい、何を言ってるんだ？」

スメラギという男は、まるでそこに誰かがいるかのような調子でひとりごとを呟いていた。鴻巣は怖くなった。男の視線は、鴻巣の右隣に集中している。

「大体だよ、被害者の目撃証言が仮に取れたとして、どうやって証明すんだよ。『はい、刑事さん、被害者と直接話をして、こいつが犯人だとわかりました』なんて言って、誰が信じる？ だからこそ、あんただって例の事件、あとで苦労したんだろ？」

（だから、こいつを連れてきた。おれは死んだ人間だからもうどうにも手が出せんが、現役の刑事のこいつなら使えるだろう。証拠なんて、後でどうとでもでっちあげりゃいいんだ。だが、そいつをやるには生身の体が必要だ。頼む、こいつを使ってあの事件を解決してやってくれよ）

「おい……？」

ひとしきりしゃべったあと、スメラギはしぶい顔で黙りこんでしまった。

湯のみはすっかり冷え切ってしまった。石油ストーブの働く音だけがする。やかんがカチカチ鳴り、湯気を吐いていた。

「なあ…鴻巣さん、だっけか。あんたが俺に頼もうとしていることはだな…殺された被害者の霊と話をして犯人を割り出せてことなんだぜ……」

「はあ？」

「高砂のじいさんが例の事件を解決できたのは、俺がその被害者と話をして犯人を知ったからさ」

「……」

「信じるか、俺の話」

「ば、バカバカしいっ！」

鴻巣はソファを立ち上がり、入口のドアに手をかけた。だが、自動であるはずのドアは閉まったまま、押しても引いても開く気配がない。

「おい、ふざけるなよっ」

声が裏返った。吐く息が白い。よくわからないが、本能がここから逃げ出せと命じている。

（頼むから、こいつを説得してくれ。おお、そうだ、俺がここにいて言やあいい。そすればこいつだってお前のこと、信じるだろうよ）

「無駄だよ、じいさん。信じないやつには、はなから何を言っても無駄さ。所詮、人間は自分に見えないものは信じねえんだから」

そう吐き捨てると、スメラギはドアノブをひねった。鴻巣がどうにも開けられなかったドアは簡単にビルの廊下にむかって開き、鴻巣はその隙間に体を入れ、逃げ出すように事務所を後にした。

【1】〜【3】*（後書き）

（ ）部分は霊となった高砂のセリフです。自ブログでは反転という手でセリフを隠し、目には見えない霊がしゃべっているという臨場感を出したのですが、こちらではそれができなかったので、霊のセリフを表に出すバージョンを別に公開しています。

霊なし、霊ありバージョン、それぞれの違いを楽しんでみてください。
い。

【4】

「何で行かせたんだっ！」

ドアをさえぎり、鴻巣を外に出すまいとしていたのは、死んだ高砂の霊だった。鴻巣とともに事務所を訪れ、ドアを開けたのも高砂だ。

事務所にいるときは霊視防止の紫水晶のメガネを外しているため、鴻巣も高砂も、スメラギの目には霊体とうつつてみえ、そのつもりで会話していたら、鴻巣は生身の人間だとわかった。霊体がそばにいるとやけに冷える。そうでなくても12月はすぐそこに迫っていて寒くなっているというのに、かわいそうに、鴻巣は、その魂が肉体を抜け出しているのではないのかというほど白い息を吐いて震えていた。

鴻巣はスメラギの正体について何も知らされていなかった。スメラギには、この世の生きた人間と同じように死者の姿がみえる。生まれつき髪が白いのは、その特異体質と何か関わりがあるのかもしれない。霊を見、霊と話ができるスメラギは、この世に心残りのある霊たちの頼み事をきき、あの世へ送り届ける仕事をしている。

「じいさん、あんたも死んだ今ならわかるだろ。生きた人間には生きた人間の、死んだ人間には死んだ人間の世界がある。生きた人間は死んだ人間の世界にかかわれないし、死んだ人間も生きた人間の世界に、顔だの足だのつつこめねえんだよ」

「それじゃなにか、お前は、俺におとなしく死んでるってのか。死んだ、殺された人たちも黙って死んでるってのか。それじゃ、それ

「じゃあ、殺され損じゃねえか！」

「言つたろ？ 死人には死人の世界とルールがある。犯人はいずれ地獄で裁きを受けるさ。殺人なら、自分が相手を殺したのと同じ方法で殺され続ける、それが地獄のルール、死人のルールだ」

「そんなら、犯人が死ぬまで待つてねえとなんねえじゃねえか。それまではこのうと生き続けるのか？ そんなの納得いかん。生きているうちに罪をつぐなうべきだろう？」

「それは生きている人間のルールが決めるこつた。だから、警察があるんだろう？ 警察ががんばればいいこつた」

「それができてりゃ、俺は死んでまでお前のところに頼みに来たりしねえっ！」

「悪いが、犯人探しは俺の仕事じゃない。俺の仕事は、心残りの解消つてやつさ」

「じゃあ、これは仕事だ。俺の心残りはあの事件を解決できなかったことだ。お前、俺の心残りを解消しろ！ あの事件のホシをあげる！」

「ケーサツじゃないから、それは無理」

「だって、おまえ、5年前のときは…」

「あれは俺の個人的事情が絡んでたからな」

【5】

5年前、20歳になったばかりのスメラギは住む家を探していた。成人したとたん、親の役目は果たしたからと父親に家を追い出され、当の父親もまた家売り払い、放浪の旅に出てしまった。しばらくの間、幼なじみの美月龍之介の家にやかいになりながら、皇の家^{すめいけ}を売るときに世話になった不動産屋を介して、おんぼろアパートの六畳間を借りた。金のない学生が多く住んでいるアパートで、スメラギの部屋では以前に学生の自殺者が出た。もっぱら「出る」という話で借り手がなかったのを、スメラギがただ同然の家賃で借り受けた。

父親と付き合いのある不動産屋は、スメラギの霊視能力を承知していた。この不動産屋が、霊がいるかどうかを見て欲しいとスメラギに頼みこんできた。

物件は雑居ビルの4階、現在スメラギが事務所として使っているその場所だ。

かつて小さな会計事務所が入っていたその場所で、15年前、強盗殺人事件が起きた。留守番をしていた3人の女性事務員が全員殺され、金庫の現金が盗まれた。事件が解決されないまま時が過ぎ、会計事務所は立ち退いたが、その後には借り手がなかった。事件は大きく取り扱われたため、殺人事件があったビルだと知らないものはいなく、殺された被害者たちの幽霊が出るという、まことしやかな噂があった。その噂は、家賃の安さに惹かれたテナントが3か月ももたずに出て行くという事が引き続いて起こって裏づけされた格好になった。誰もいない事務所で、キーを叩く音がする、無言電話がかかってくる、机の上のものの配置が変わるなど、不可解な出

来事が続き、とうとう借り手がなくなってしまった。

強盗殺人事件の被害者たちの幽霊が出るというその場所に行き、はたして幽霊がいるのかどうか見てくれないか――それが不動産屋の頼みだった。

スメラギが見たのは、2人の女性たちだった。ともに20代前半ほど、強盗事件の被害者たちと年代が一致する。自分たちが殺されたと信じられず、死神が魂の回収にやってきたとき、とつさに身を隠し、あの世へ行き損なってしまった。スメラギは、2人にあの世に旅立ってもらおうと、死神を呼び出した。

だが、2人は死神に連れられてあの世へ行くことを承知したものの、犯人が捕まるまではこの世にとどまり続けるといつてきかないでは犯人を知っているのかと聞けば、2人とも知らないという。

「知らないというのは、まったく見知らぬ人か」と聞くと、「顔は知っている」と人が口をそろえて言った。

「じゃあ、知り合いか」と聞くと、「知り合いではない」という。顔は知っているが、名前は知らない。会計事務所の顧客でもないという。それで「顔を知っている」とはどういうことなのか。

「ビルの外壁の塗り替えをしていた人だ」――と誰かが言った。外壁の塗り替えが終わった一週間前までビルに出入りしていた男で、顔は見知っているが、名前は知らない。それでも手がかりには違いないだろうと、スメラギは警察へ匿名で情報を入れた。だが、警察はすぐには動かなかった。というのは表向きにはそう見えただけで、実際には高砂刑事をはじめとした当時の担当刑事たちがスメラギの情報に色めきたった。事件当初から、その男には疑いがかけられて

いたが、これといった証拠がなかった。

高砂は事件現場となった雑居ビルの4階を訪れた。事件当時、壮年だった高砂の頭はさびしくなり、階段をあがる足の節々が痛んだ。事件現場を訪れた高砂は驚いた。事件から15年近くが経っているというのに、現場は当時そのままに保存されていた（実は事情があってスメラギがそうしたのだが、この時の高砂はその事情を知らない）。

応対に出たのは、白髪の若い男だった。高砂と男は、簡単な世間話をした。男は事件を知っていて、自然と会話は事件のことになっていった。そのうち、高砂は奇妙なことに気付いた。男の年齢はどうみても20歳前後、事件当時は5歳ぐらいだろう。新聞などで事件を知ったにしても、やたらと詳しい。きわめつけは、男の放った一言だった。男は「ひどいもんだよね、ドライバーで刺し殺すなんて」と言ったのだ。

凶器は特定されていたが、公表はされていない。犯人でしか知れない情報を、なぜこの白髪の男が知っているのか。

高砂が問い詰め、スメラギはとうとうすべてを告白した。

「信じないだろうね―」

捨て鉢にスメラギはそう言ったが、高砂は信じた。年をとって、奇妙な現象のひとつやふたつ経験していたからか、あるいは超常的なものを信じたいという気持ちがあったからか。長い警官勤務を経、解決に至らない事件に出くわすたびに、被害者・死者にむかって知っていることがあつたら話してくれよと祈ってきたからかもしれない。

い。

【6】

「なあ、頼むよ、スメラギ」

一家惨殺事件の被害者の霊と話をして犯人を捜しだしてくれと頼む高砂が深々と頭を下げ、禿げ上がった頭頂部を眼の前にしながらも、スメラギは首を縦にふるうとはしない。

「じいさん、何だって、その事件にこだわるんだ」

もしや引き受けてくれるのかと、高砂は期待に顔をあげたが、スメラギの渋い表情に、期待は泡と消えてしまった。

「葬式で、みちまったからなあ……」

高砂の目には、今もそのときの光景が焼きついている。出棺のとき、ひときわ周囲の涙をさそったのは、小さな棺おけだった。わずか9歳で凶行の犠牲となった一家の長男、坂井 徹の遺体が納められた棺おけだ。その遺体には両足がない。

軽々と運ばれていく小さな棺おけの小さな遺体は、軽々しく扱われた命そのものだった。必ず犯人をあげてみせる――目頭をあつくさせながら、高砂はかたく心に誓った。

「じいさん。じいさんの悔しい気持ちはわからないでもないけどさ。事件のことはあのおっさん刑事にまかせときなよ」

「……」

「ああつと、いつとくけど、自分が死んだからって、被害者の霊とコンタクトしようなんて思うなよ。大概は生まれ変わっちまってるし、そうなるって昔のことは覚えてねえしな」

「そうなのか……」

「言つたろ。死人には死人の世界とルールがある。あんたは死んだばかりで何も知らねえだろうけどな。余計なこと考えてねえで、おとなしくあの世へいつときな」

高砂の魂をあの世界へ連れていってもらおうと、スメラギは死神を呼び出すべくケータイに手を伸ばした。

【1】

被害者と話ができるってんなら、警察はいらねえやー

調書のコピーをくる鴻巣の手が荒れている。

高砂は何だってあんなインチキ霊能者なんかにつかつたんだ。幽霊なんか、いるわけないじゃないか、子どもじゃなるまいし、いい大人が、しかも還暦過ぎのベテラン警察官ともあるう人が、「被害者と話ができます」なんて眉唾話に何でのせられたんだか。

「霊がみえます」だの「霊がこう言ってます」だのいうものは、心理トリックってやつだ。インチキ占い師が使うのと同じ手口だ。「悩みがありますね？」って聞かれたら、それは誰だって大小の差はあれ、悩みはある、「はい」って言うだろう。

「霊がいる」と言われたら、信じるものは「それはきっと亡くなった母です」とか何とか口走ってしまふ。そうなったらしめたもの、「亡くなったお母様がうんぬん」と勝手に話を作ればいい。どうせ真実なんて確かめようがないんだから、でたらめ言っただってバレやしない。先方は、自分が母親だ、って答えを言っちまったことなんかすっかり忘れて、霊能者ってやつが母親の姿をみた、と勘違いしてくれる。そういう仕組みだ。

なんで、還暦過ぎた人生経験豊富な高砂がそんな簡単なこともわからなかったのか。

刑事としても、人としても、鴻巣は高砂を尊敬していただけに、子どもだましのトリックに騙されたのが自分の肉親のような気がして、やたらと腹立たしい。

高砂は昔かたぎの刑事だった。犯罪者も人の子だ、が口癖で、現場をなめるように確かめると聞き込みがその捜査手段の主だった。どんなにうまく証拠を消したつもりでいても、所詮は人間のすることだ、犯人は必ずナメクジのはった後のような痕跡が残している、そう鴻巣に教え、被害者の人間関係、現場の周囲の聞き込みを徹底するよう、叩き込んだ。ぬめぬめとした人間関係をあらっていくうちに、犯人や犯人につながる事柄に出くわした。

容疑者と思われる人物にたどりついたら、高砂は食らいについて離れなかった。犯人も人の子なら、こちら人も人間だと言って、徹底的に向き合った。自分の犯罪を自慢したくてしょうがない腐った野郎には、そのねじまがった自尊心をくすぐって自供させてやったし、こいつには一言言っておいてやらないといかん、という犯人には説教たれた。殴られる痛みを知らなかった若者を殴りつけたこともあった。涙もろくて、犯罪に走らざるをえなかった事情をかかえた犯人に同情して泣いたりもした。いい年をして、感情の起伏が激しく、いい意味で大人でない人だった。

それでも社会常識はあったろうに、そんな高砂が何故インチキ霊能者に騙されたりしたのか。

殺された被害者と話ができるなんてこと、まともに受けていられるものかと、鴻巣は憤然たる思いで、かつての調書の写しをめくっていた。何か見落としているものはないか、犯人につながるものがあるとするば、それは必ず調書にあるはずだ、当時見過ごされてしまった何かが。被害者の霊と直接話をすれば、簡単に犯人が逮捕できるのではないかなど考えるのはバカげている……。

【2】

富士見台一家殺人事件と呼ばれる一家惨殺事件が発生したのは、19xx年の暮れごろだ。正確な事件発生日と時間はわかっていない。近隣に住む兄の坂井圭介が正月の挨拶に一家を訪れ、一家の惨殺体を発見、事件が発覚した。発見当時、遺体は腐乱しており、兄と近所の証言から、一家が凶行にあったのは、家族そろってハワイ旅行に出かける前日、12月25日の夜から未明にかけてだっただろうと推測される。

前日の夕方には、妻の由紀子が留守を頼むという話を近所にしており、夜には兄の圭介が一家に明日からの旅行を楽しんでくるようにという電話をかけている。この時点で一家に変わったところはないかった。

事件現場の玄関先にはスニーカーが並べられていたから、旅行の準備をして就寝したところを襲われたのだろう。遺体が身につけていた血みどろの衣服はパジャマだった。

近所に、旅行に行くのでと言ったのは留守を頼むという意味合いもあったのだろうが、それがかえってあだとなった。しめきった雨戸は用心のため、見当たらない車は空港までの足だっただろうと、怪しまれなかった。雨戸で隠されていた割れた窓から死臭が漂ったはずだが、年末年始の溜まった近所の生ゴミだろうと見過ごされてしまった。期さずして、事件の発覚は遅れてしまった。

明けて1月7日、その日は一家が旅行から帰ってくつろいでいるはずの日だった。年末から年始にかけて旅行へいつていた弟一家と同居する母親への遅い正月の挨拶に訪れた兄がみたものは、変わり果てた姿の一家だった。

玄関の呼び鈴をいくら鳴らしても人が出てくる気配はない。数日前には帰国しているはずだというのに、郵便受けには新聞がたまっている。車がなく、買い物で留守にしているかとも思ったが、母親ぐらいいてもいいはずではないか。

不審に思った兄が庭先へまわると、雨戸がほんの少し開いている。指をいれて引き開けると、割れた窓ガラスが目に入った。嫌な予感に、窓から居間へあがった兄が最初に目にしたのは、台所で倒れていた弟の無残な姿だった。

一家の主、坂井信行は台所で殺された後、頭部を切断されていた。同居していた母親は同じく1階の和室の布団のなかで左腕を切断されてみつかった。妻の由紀子と長男の徹は、2階のそれぞれの寝室で、由紀子は右腕を、徹は両足を切断された状態で発見された。

司法解剖によれば、殺害されたのはクリスマス前後、すでに腐敗がすすんでいたため、正確な日時は割り出せなかった。死因は絞殺または窒息死、おびただしい血が残されていたが、これは遺体切断によるもので、死後直後に行われたものとみられている。

捜査は、物取りと怨恨の両方から進められた。

家は荒らされ、現金（旅行用のものと思われる）と貴金属がなくなっていた。盗みに入ったところを主人にみつかって凶行に及んだか、それとも恨みがあって一家を殺害、強盗にみせかけるためにめぼしいものを盗んでいったのか。

強盗説を怪しむ声は、捜査の早い段階であがっていた。強盗が入ったと思わせるには不審な点があった。ひとつは侵入経路だが、玄

関の戸は施錠されており、鍵も、兄の合鍵を含め、全部の存在が確認されている。とすれば、割れた窓ガラスがあやしいのだが、この窓ガラスの割れ方がくせものだった。窓は、内から外にむかって割られていたのである。庭先に散らばる窓ガラスの破片を踏みそうになって叱られた鴻巣はよく覚えている。侵入しようとして外から割られたのなら、ガラスの破片は居間のフローリングの床の上に散っていないかならないのではないか。

部屋の荒らし方も、舞台装置がかった。盗む側には、効率的な荒らし方というものがある。やたらめったら部屋を荒らしていたのでは、時間ばかりかかってしまうし、いざ逃げようというときには足の踏み場もないということになりかねない。彼らは、めばしい場所を集中的にねらう。だが、現場にはその痕跡がなかった。筆筍などはあけられていたが、引き出しの戸が出ているものと出ていないものがある。盗みに入ったのなら、すべての引き出しを確認するのではないのか。

そして何より、遺体の状況が強盗の可能性を否定していた。盗みに入ったところをみつきり、殺した。そこまではありえるとして、人目につき、後で処理に困る遺体の一部を持ち帰ったりするものだろうか。

捜査は、次第に怨恨説へと傾いていき、高砂を筆頭に、被害者の交友関係が調べられた。

被害者、坂井信行は、近所で小さなスーパーを経営していた。経営はうまくいっておらず、多額の借金を抱えていた。銀行のみならず、消費者金融、いわゆる街金からも融資を受けており、近所の証言によれば、うさんくさい人間が一家の周りを徘徊していたこともあったという。借金返済が滞ったあげく、みせしめとして殺された

のではという説も浮かんできたが、
確証をつかむまでには至らず、
捜査は行き詰ってしまった。

【3】

「何の調書ですか？」

強いにおいが鼻をついた。デパートの化粧品売り場と同じにおいに、鴻巣は息苦しくなった。刑事課に配属になったばかりの土居翔だ。鴻巣が若いころは安っぽい整髪剤が新人刑事のにおいだったが、このごろではブランドものの香水がとってかわったらしい。名前まで翔と艶かしい。25にもなつて翔だなんて、子どもでもあるまいし、70のじいさんでも翔とは若作りもいいとこだ。

「あ、15年前の一家バラバラ事件。確か、もうすぐ時効ですよね」

大学出の坊ちゃんは何にでも鼻をつっこみたがる。ドラマか映画か、はたまたミステリーファンなのか、土居は、刑事課の刑事は難解な事件を抱えているものだと思いこんで、小さな事件をなおざりにするくらいがあった。

ドラマのような事件は実際は少なく、多くは金と色と欲が絡んで、犯人は大抵被害者の知り合いから見つかる。あと数ページというところで意外な人物が犯人でした、なんて下手なミステリーのような筋立ては現実にはない。もちろん、密室殺人もだ。事件捜査をパズル解きか何かのように考えている土居には、借金のもつれ、痴情のもつれといった、単純な事件を扱うのがとてつもなく苦痛らしい。

「何か事件の解決につながりそうな新しい証拠でも出たんですか？」

土居の目がぎらついている。時効直前の事件解決となれば、マスコミがほってはおかない。まして、一時期世間を騒がせた一家バラ

バラ殺人事件だ。その優秀な頭脳をいかになく発揮し、事件を解決してみせれば、地位も名誉も一手手の内に近くなる。土居はそう考えているに違いない。

（そうはさせるか）

殺人事件解決は、頭の体操パズルじゃねえんだという、鴻巣の意地が調書を閉じさせた。

事件の中心には、人がいる、血が流れる。大学で何を勉強してきたか知らないが、“データがどうのこうの、プロファイリングがなんの”と言つてばかりで、ろくに人生経験もないやつに、人間のどる臭い部分がわかつてたまるか。

確かに、頭の回転はいい。捜査会議などでも、時々、上の連中をその弁舌でまいてしまう。だが、鴻巣には、ただ単純なことをもつたいつけてくどくど言っているに過ぎないように聞こえる。握り飯がうまいのはおかあちゃんが握ったからだ、ということ、米がどうの、水がどうの、炊き方がどうのと講釈たれているようなもの。うまいものはうまい、それでいいじゃないかという鴻巣は、だから他ほど土居を買っていなかった。

「怨恨の線で捜査していて……でも怨恨の線じゃないでしょうね」

確かに異常な事件だった。子どもを含む一家全員が殺され、遺体の一部が持ち去られた。見た目の異常さに惑わされまいという鴻巣と対照的に、土居はひたすらその異常性にくらいいていた。

「窓ガラスが外側にむかって割られている。外から入ったならガラスの破片は内側、リビングのフローリングに散っているはずですよ

ね？」

現場写真をみながら、さも大発見したかのように得意げな土居だが、そんなことは現場に足を踏み入れた瞬間にわかりきっていた。何より、庭先に散ったガラス破片を踏んで鑑識に起こられたのは、鴻巣自身なのだから。

現場も行きもしないで、あの死臭を嗅がずに事件の解決ができるか――

「現場百遍！」

ふと、現場へ行つてこい！　そう高砂に怒鳴られた気がした。

捜査に行き詰まって調書を睨んでいると、高砂は頭を叩き、「お百度を踏んでこい！」と鴻巣を現場へ向わせた。当たり前のことは見過ごされ、調書から漏れてしまう。何か見落としているものはないか、五感を最大限に働かせて、どんな些細なことでも見逃すな。高砂はそう鴻巣を叱咤激励した。

（まさか、いるわけじゃないだろうな）

高砂の霊でもいるかと、鴻巣は背後を振り返った。土居が不思議そうな顔をした。

「何です？」

「いや、別に」

鴻巣は、調書を土居の手から奪うと、机の引き出しにしまった。

「ちょっと出てくるわ」

「はい」

「僕もいきます」とは、決して言わない男だった。もつとも、言われたところで、土居についてきてもらいたくなかった。鴻巣は困ってしまった。ただろうが。

【4】

事務所の黒電話が鳴り、三度目のベルで、事務員の山口京子が受話器を取った。

「はい、スメラギ探偵事務所。あら、切れちゃった」

電話が鳴ってもすぐにとらない、相手に話す心の準備をする時間を与えると教えられた京子は、3度目のベルで電話を取る。だが、幽鬼の京子が話しかけても、相手には何も聞こえないので、かけてきた相手は不審に思って電話を切ってしまう。自分が死んでいる意識のない京子は、首をかしげながら、書類の整理の仕事に戻った。

京子は、20年前に起きた会計事務所強盗殺人事件で殺害された女子事務員の3人のうちのひとりだった。2人まではスメラギが呼んだ死神に連れられてあの世へ旅立ったが、京子だけが自分が死んだとは知らずに今も事務所に居続けている。京子は、2人の幽鬼が成仏した後に、スメラギの前に姿を現したのだった。

ふたたび、電話が鳴った。今度は最初のベルが鳴り終わらないうちに、スメラギが受話器をつかんだ。事務作法がなっていないといわんばかりに、机のむこうから京子がスメラギを睨みつけた。

「スメラギたんて……」

「あー、拓也くん。嵐だけど。キミんとこの電話、調子悪いね。さつきかけたんだけど、声が聞こえなくてね。そろそろ、その黒電話、取り替えたほうがいいんじゃないかな」

電話をかけてきた相手は、コトブキ不動産の嵐寿三郎だった。以

前は、自分の名前の一字をとった寿不動産という名で商売をしていたが、漢字だと読めない人がいるからと、2、3年前にカタカナのコトブキ不動産と名をあらためた。「カップルにしろ、新婚さんにしろ、“ことぶき”という響きはウケがいいんだよ」と、嵐はほくそ笑む。

50少し手前で、本人は七福神の布袋を気取っている小太りな親父だ。嵐との付き合いは、寿不動産と漢字を使っていた頃からだ。スメラギが20歳になったと同時に、スメラギの父親は、それまで住んでいた家売り払い、放浪の旅に出てしまった。その際、世話になったのが嵐寿三郎と寿不動産だった。その後、美月の家に居候しながら部屋を探していたスメラギに今のアパートを紹介したのも、事務所を世話してくれたのも、嵐だった。

バリトンのよく通る声で、嵐はえんえんと最新の電話機の素晴らしさを語っている。まるで家電売り場のセールスマンと話しているかのようだ。だが、時代遅れといわれようと何と言われようと、スメラギは愛着ある黒電話を変えるつもりはない。ダイヤルをまわしている間に次にまわす番号を忘れてしまったとしても、あのジジツとした音がスメラギはたまらなく好きなのだ。それに、事務所の備品を変えると京子が混乱する。自分が死んでいるとは知らない京子のために、事務所は彼女が死んだときそのままの姿で留めておきたかった。

「急ぎの用があるなら、ケータイへかけてくれたらすぐつかまいますよ」

「拓也くん、ケータイ出ないじゃないか」

着信で相手をみて出ないことがバレそうになった。

「で、今度はどんな物件がかえているんですか？」

風向きがあやしくなりそうだったのと、はやく話を切り上げてしまったかったのとで、スメラギは話題を変えた。嵐がスメラギに電話をかけてくる理由はひとつ、スメラギに頼みたい事があるのだ。

「今度のはちょっと、私もはじめて扱う物件だね。いや、実際困ってるのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6992y/>

「心霊探偵 スメラギ」シリーズ3 時効の闇

2011年12月12日08時50分発行